特殊環境の中で、さらに期限付きで短期間のうちに様々なプロジェクトを成功させていかなければならない、というミッションがあり、「溶け込む」要素を探しているうちに多くの日本人青年が焦りだす。これは多様な要素が渦巻く環境に、単に「溶け込こもう」とするのは無理であり、「我」をまず出し、どのような言い方でもいいから自分の意見や、やり方を提示することが先であり、様々なフィードバックに柔軟に対応しながら意見交換でプロジェクトを作り上げていくという経験をしているのだ、と気づく。「混沌から自分の芯を見つける」のである。多くの国でビジネスを展開する企業が喉から手が出るくらい必要としている「グローバル人材」の基本的経験である。実際に、下船後の学生の就職先は世界で仕事をしている商社に決まることが多い。

しかし、この経験には挫折がつきものである。まじめな日本人青年は、「OPY が悪いのに謝ってくれない（謝り方の違いも異文化コミュニケーション）」とか「私が一生けんめいやってるのに OPY が不真面目（真面目、不真面目という価値観も文化の差異があり）」などというよく聞くセリフは日本人が最終的に世界に認められる、真面目さ、丁寧さ、最後までやりとげる力を証明しているのだが、そして最終的には外国人参加者がそれに感動するのであるが、特に日本人参加青年は落ち込む。そこで船の威力が発揮される。

（イ） 船は移動し、前進する乗り物である

陸地で閉鎖環境で行うのであれがその合宿は強制であり、陸上で 40 日間も同じ施設にいると精神的な負担は大きいが、船は移動をしている空間であり、参加青年が落ち込み、行き詰っていても、その心は大海と大空によって勇気を与えられる。友の言葉に励まされ、徐々に希望を感じ、遠くの寄港地の陸が近づいてくるのを見ながら、終わりがないようなプロセス到達するところがあるのだ、と感じ、また、その寄港地に感謝をし、自分が遠くに来たこと（精神的な前進と、異国の地にいるのだ、という感動）を感無量に思うのである。船が象徴的な移動、前進の役割も果たしている。また、寄港地活動は大変に重要である。個人旅行では行けない様な現地視察も貴重であり、各国の卒業生ネットワークの活躍ぶりを見て刺激を受けるのである。また、世界青年の船は内省的なフィードバックを絶えず求められる集中プログラムであるので安定した日常性、恒常性が必要となってくる。寄港地でも「帰る家」となる船があることで、参加者の精神状態は安定したものとなり、また、寄港地活動の振り返りもしやすい。飛行機で移動すると、そのたびに荷造りをするなど、非日常の要素が増え、プログラムの流れが分断されてしまい深く内省するのが困難になる。また、安全面でも全員がひとつの宿に（船）に帰ることは優位である。

3　日数がある程度（長期間）必要である、ということの意味

この船内プログラムの１ヶ月半という期間はグローバル人材にもっとも必要とされる前述の「異文化に対する感受性」を育むのに必要最低な期間である。多くの一般的な留学プログラム（ひとつの外国に勉強をしに行くプログラム）での「異文化に対する感受性」データでは船と同等の効果をあげるのに最低1学期(4ヶ月)が必要とされるといわれている。

世界青年の船では、各国の青年たちによる自主的なプロジェクトが多数立ち上がるのだが、その際に前述のような特殊環境であるからこそ、「異文化に対する感受性」を高めなければプロジェクトは成功しない。現に対立や無力感に悩み、自身をなくす青年（日本人青年でなくとも）がいる。世界青年の船24回事業で行った調査のうち、上船後3週間目（21日目）が「一番自信をなくした」という結果であった。つまり、最初は「たくさん外国の友達が作れる」と無邪気に期待して参加した青年たちが、共同プロジェクトを行うにつれて異文化の摩擦に気づき、もがき、落ち込む、ということを一度経験するのだ。船ではその困難さから逃げられないので、互いに助けあうのだが、実は「国の代表」として参加している青年たちにとって、助けを求める、というのはあまりたやすいことではない。しかし、この経験をした青年たちは少しずつ自信を取り戻すともに、コミュニケーション力が上がっていく。そして、世界船のテーマである「青年の社会貢献」に結びつくような話し合いをし、「異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性」、あるいは企業のいう、「多様性や不確実性の許容度と対応力」の基礎力が養われるのに、さらに3週間、合計最低6週間はかかる。しかし、これは4ヶ月の留学よりは短いし、船という特殊環境での集中プログラムであるからこそ可能になっている日数なのである。そして各国青年がまだ本国にいる間に行う事前プログラムや事後プログラムをさらに充実させることで本体プログラムの効果はさらに上がるものと思われる。

「世界青年の船」事業について

野村　彰男
第19回「世界青年の船」事業　主任指導官
国際交流基金日米センター所長
元朝日新聞論説副主幹
元朝日新聞アメリカ総局長
元朝日新聞ジャーナリスト学校長
元国連広報センター（東京）所長
元早稲田大学大学院公共経営研究科客員教授

私は第１９回の世界青年の船に主任指導官として乗船いたしました。１３カ国２６０人の青年たちとの６週間の船旅は、実に貴重な異文化交流の日々でした。先進国と途上国、キリスト教、イスラム教、仏教など異なる宗教の出合う中で、日々、さまざまなテーマで意見を交わし、熱く激論する過程で、青年たちがときに厳しく反発しあいながらも、文化や価値観の多様性、それぞれの出身国における若者を取り巻く政治状況、社会環境の違いに互いに気付き、視野を広げていく様を見るのは喜びでした。

そうした中で、私が最初のころ気付いたのは、英語を共通語とするディスカッションコースと呼ばれたクラスでの、日本の青年たちの受け身の姿勢、自己主張の少なさ、人と違う意見を言うことをためらう態度でした。しかし、英語の上手下手にかかわらず自分の意見を堂々と言い、異なる意見に反論する外国青年たちから刺激を受け、また、日本人青年になんとか発言させようとアドヴァイザーたちが工夫をこらすうちに、発奮して議論に参加する日本人が出てきて、６週間という限られた期間ではあっても、この船旅が彼らの成長を促し、国際化への背中を押す貴重な場を提供している事を痛感しました。
参加各国で青年の船に乗る多くの外国青年たちが優秀な人材であること、それぞれの国で参加経験者が事業に協力する活動を継続している点などを考え併せると、将来の有望な日本シンパを醸成する事業である点も強調しなければなりません。

さらに、この事業の価値が船上にとどまらないことにも注目すべきです。下船後、参加青年たちはメールと実際の相互訪問などの交流を通して強い絆を保ち、いわば同期会組織を維持しているのです。船でテーマとした青少年育成やボランティアリズム、環境保護などの仕事に従事している青年たちが、互いにSNSやFacebookなどを通じて連絡をとり、自分の活動を知らせ、それへの協力を募る有様は、事業がもたらす成果を十分実感させます。意義ある事業であればこそ、「継続こそ力」であることを強調したいと思います。

「世界青年の船」事業について

Ashuboda Marasinghe
第10回「世界青年の船」事業　参加青年
長岡技術科学大学　准教授

スリランカ人の私は、中学生の時に見た「おしん」に感動して日本の文化に触れました。もっと知りたい、学びたい、そして日本と交流したいと願い海を渡り日本に来ました。日本の文化は必ずしも「おしん」の世界そのものではありませんでしたが，日本の文化に触れて本当に感動しました。機会があって，1998 年に「世界青年の船」事業に参加しました。参加者 294 名，17 カ国の青年が 59 日間共同生活をしました。日本人 116 名，外国人 178 名、世界の若者が通常の様々な拘束を離れて，共に食事をし，講義を聴き，ふれあい，相互に意見を交わしました。船上という空間に，様々な文化を持った人々が集まって，共に生活する事によって，私は本当に深い文化の交流の時を経験しました。日本人の若者が何を考えているのか，アジア各国の若者がどのような夢を持っているのか，毎日の船上の生活を通じて，深く考え，知る事ができました。

普段は自己主張しない日本人が，自国と海外の経済との関係について，日本の将来はアジアとの連携に係っているとの確かな考え方を持っている事を知りました。また，国によっては日本に対しての知識が偏って教えられている事も分かりました。スリランカは，親日的な国でしたので，国々によって日本に対する知識の与え方に違いがあることを知りました。また，食文化の共通点や相違点，例えばお米のことを話し合って，将来の食物のありかたについても話し合う事ができました。

「世界青年の船」事業に参加して、スリランカに帰ってからは、この経験のおかげで、視野が広がり国際的な目と心、そして夢を持ちました。

スリランカに帰りコロンボ大学で働いた際、大学からアメリカとスウェーデンに行くチャンスをもらいました。ですが「世界青年の船」事業に参加した経験を持つ私は、いつか日本へ恩返しがしたい、日本への想いと憧れを持ち続けていました。日本の技術を勉強すると決めていました。そして夢を実現して日本に渡り日本で仕事を持ちました。それから 2010 年から 2011 年までスリランカにおいて、日本での経験を生かしスリランカ政府の仕事をリーダーとして行うこととなりました。「世界青年の船」事業での経験が仕事に生かされ、役立つこととなりました。（スリランカ政府での経験を添付致しました。）スリランカ政府での仕事は大変充実したものでしたが、日本の震災のニュースを目の当たりにした私は、再び日本に戻る決意を致しました。第二の故郷、大好きな日本で再び生活しよう思ったのです。このような考えを持つ原点が、「世界青年の船」事業での経験にあります。

「世界青年の船」事業は，将来を担うアジアの若者達が相互理解をし，未来に向かって